

平成 21年 4月 24日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19530802
 研究課題名(和文) 読解力，リテラシー等の能力育成を目指す教科の在り方に関する総合的研究
 研究課題名(英文) A general study about the ideal method of the subject aiming at ability upbringings such as reading and the literacy
 研究代表者 川上昭吾 (KAWAKAMI SHOGO)
 愛知教育大学・教育学部・名誉教授
 研究者番号： 10033896

研究成果の概要：

本研究は、学校教育における目標，特に学力とリテラシーに関して，教育学，及び国語科，算数・数学科，社会科，理科，音楽科，図工・美術科，技術・家庭科，保健体育科，生活科，英語科等の各教科ではどのようにとらえているかを明らかにし，それを研究報告書にまとめた。報告書はCDとして分担者全員が持ち，適宜大学の授業で活用できるようにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：学力，読解力，リテラシー，コンピテンシー，教科教育学概論

1. 研究開始当初の背景

大学の教科教育学の教員と教育学の教員が，学校で生起している問題についてともに学び問題意識を共有化する必要があると考える。そこで，教育学をコアにして各教科の研究者が学力という目標を共に研究しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は，学校教育における目標，特に学力とリテラシーに関して，教育学，及び国語科，算数・数学科，社会科，理科，音楽科，図工・美術科，技術・家庭科，保健体育科，

生活科，英語科等の各教科ではどのようにとらえているかを明らかにすることを目指す。具体的には，「学力」についての諸課題，つまり「学力低下」，「新しい学力」，「確かな学力」，さらに最近の「リテラシー」，教科における「読解力」についての学術的な諸見解を整理し講義に生かすことができるテキスト作りをする。

3. 研究の方法

研究の組織は，全体研究部門と教科研究部門に大きく2分し，教科研究部門はさらに10教科分野に分かれる。最終的には，教育学分野と10の教科で講義テキストを作成する。

[全体研究部門の研究] 「読解力」や「リテラシー」が注目されるようになったのはPISA2000で提案されてからのことである。平成元年に改訂された学習指導要領では「新しい学力観」が提案され、次いで「確かな学力観」に引き継がれている。一方では、マスコミや家庭は「受験学力」を高める教育への要望が強い。全体研究部門では、「学力とは何か」という問題を全員で追及し、それとPISAが指摘した「読解力」、「数学的リテラシー」、「科学的リテラシー」との関連性を明らかにする。

[教科研究部門]10教科分野では個別に研究を進める。

4. 研究成果

本研究は、学校教育における目標、特に学力とリテラシーに関して、教育学、及び国語科、算数・数学科、社会科、理科、音楽科、図工・美術科、技術・家庭科、保健体育科、生活科、英語科等の各教科ではどのようにとらえているかを明らかにした。

大学では、日頃接触が薄い各教科の研究者が本研究目的の実現のため集まり、研究会を重ねることができ、研究会を通して相互理解を深めることができた意義は大きい。

研究の成果を研究報告書にまとめた。報告書はCDとして分担者全員が持ち、適宜大学の授業で活用できるようにした。

報告書には、全体研究部門の成果として「愛知県犬山市の教育改革と犬山市立犬山南小学校のキャリア教育」(川上昭吾)、および「フィンランドの文化・社会・家庭・学校」(エリナ マルゲッタ オオヤマ・川上昭吾)も掲載した。

(1) 報告書の構成は次のようである。

「幼小連携」と学力観について(小宮山潔子・国土館大学)、科学リテラシー育成のための教師教育(橋本健夫・長崎大学)、学力・リテラシー・コンピテンシー 学校教育の今日的課題(山口匡・学校教育講座)、言語活動の充実(中田敏夫・国語教育講座)、我が国の伝統や文化についての学習の意義と実践(船尾日出志・社会科教育講座、山田佳秋・長久手町立長久手西小学校)、算数・数学教育における学力構造：学力観の変遷を手がかりにした学力構造についての反省(山田篤史・数学教育講座)、理科授業論の充実 - 発見学習に受容学習を付加 - (川上昭吾・理科教育講座)、体験活動の充実(野田敦敬・生活科教育講座)、音楽科における学力低下の実態とその様相(村尾忠廣・音楽教育講座)、「我が国の伝統や文化」に関する教育について - 美術教育の観点か

ら考える - (ふじえみつる・美術教育講座)、リテラシーとしての運動技能(森勇示・保健体育講座、吉田正・保健体育講座)、保健教育のあり方(後藤ひとみ)、小学校段階における外国語活動(杉浦正好・外国語教育講座)、ものづくり教育(技術科教育)の充実に資する教材について(宮川秀俊・技術教育講座)、家庭科で育てる学力とは - 実用的・断片的知識やスキルの習得からリテラシーへ - (山田綾・家政教育講座)

(2) 研究代表者がとらえた「学力」

「学力」という言葉は様々な理解のされ方がされている。

社会的には「受験のために強いこと = 受験学力」ととらえられることがある。「学力低下論」で指摘された学力は、この意味で使われた。

教育で目指すべき学力とは、基礎基本をきちんと身につけ、その上で問題解決の力やその他の能力を身につけることであると考える。

そのような学力を身につけるために、理科教育では、問題解決による学習を帰納法と演繹法を有効に使いながら工夫していく必要がある。そのための授業方法改革を提案した。すなわち、発見のプロセスを重視する授業一辺倒から、確かめのプロセスを重視する授業を加味することによって、帰納と演繹をバランスさせて問題解決の学習を充実していく。このことによって、理科教育を通じた確かな学力の定着が期待できる。

(参照：雑誌論文の1；川上昭吾・渡邊康一郎・松本織、「有意味受容学習の研究」、愛知教育大学教育実践総合センター紀要第12号：183-190, 2009.)

(3) 犬山市の教育

犬山市の教育改革は以下のように要約できる。

犬山市のすべての学校で「犬山の子は犬山で育てる」を掲げ、学校の自主性に基いた「学びの学校づくり」を推進している。

授業の向上が推進されている。

犬山市は、すべての小中学校のすべてのクラスを30人の少人数を実現し、一人一人の子どもを大切に育てる教育を実現した。

「全国学力・学習状況調査」に参加するまでもなく、基礎基本は定着しているという自信を教育委員会は持っている。

市が財政的な援助を惜しみなく行っている。それに応えて教員は意欲的である。

(4) フィンランドの教育

フィンランドはPISAで高い得点をあげているが、その背景には次のような要因がある

ことをフィンランド人のマルゲッタさんとともに確認した。

社会的に尊敬されている優れた教員の存在

学校の教育環境が整備されていること、特に少人数教育が実施されていること、小学校では語学関係の科目の授業時間数が多いこと

高福祉の社会で豊かな生活が実現され、そのために家庭の教育力が高いこと

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 13 件)

- 1 川上昭吾・渡邊康一郎・松本織,「有意味受容学習の研究」,愛知教育大学教育実践総合センター紀要第 12 号: 183-190, 2009.
- 2 川上昭吾・寺田安孝, リピーター育成を視野に入れた高校生のための博物館活用講座, 愛知教育大学研究報告第 58 輯(教育科学編): 203~208, 2009.
- 3 小宮山潔子, 「幼小連携と合科的・関連的指導」, 国土館大学初等教育論集第 10 号: 23-41, 2009.
- 4 橋本健夫, 「現場に根付く研究の推進」, 理科の教育 Vol. 57(669): 4-7, 2009.
- 5 松本みゆき・野田敦敬, 「生活科における生命尊重の教育についての一考察～飼育活動から精神的な自立へ～」, 愛知教育大学研究報告教育科学編第 58 号: 1-9, 2009.
- 6 川上昭吾, 「幼児・小学校低学年児童への自然教育」, せいかつか&そうごう第 15 号: 20-27, 2008.
- 7 磯崎哲夫・ヨウニ ヴィーリ, 川上昭吾, フィンランドにおける理科の教員養成教育 - そのシステムと特色, 理科教育学研究 Vol. 48, No. 3: 1-11, 2008.
- 8 川上昭吾・杉浦貴史・寺田安孝, 学校と博物館の連携を進める実践的研究, 愛知教育大学研究報告第 57 輯(教育科学編): 173~181, 2008.
- 9 寺田安孝・山中敦子・川上昭吾, 科学に関心を持つ市民を育成するための博学連携プログラムの実践, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 第 11 号, pp. 55~60, 2008.
- 10 山中敦子・川上昭吾, 学校 科学館連携におけるミュージアム・リテラシー向上の試み, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 第 11 号: 61~66, 2008.
- 11 森 勇示, 「保健体育 10 年経験者研修の課題について - 教科に関する質問から - 」, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 11 号: 181-190, 2008.
- 12 山田篤史, 「算数・数学教育の今から明日へ: 「教師教育」という研究領域の可能性」, 愛知教

育大学数学教育学会誌『イブシロン』vol. 50: 21-26, 2008.

- 13 澤たか子・船尾日出志, 「アイデンティティの形成と修正」, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要第 11 号: 127-132, 2008.

〔学会発表〕(計 4 件)

- 1 川上昭吾, 「教員養成系大学・学部の教育課程の研究」, 日本理科教育学会第 58 回全国大会(福井大学), 2008 年 9 月 14 日.
- 2 森勇示, 「保健体育 10 年経験者教員研修のプログラムについて - 平成 19 年度愛知県の実施内容から - 」, 日本教師教育学会第 18 回大会(工学院大学), 2008 年 9 月 14 日.
- 3 野田敦敬, 「生活科における自然とのかかわらせ方についての一考察」, 日本理科教育学会第 58 回全国大会(福井大学), 2008 年 9 月 15 日.
- 4 小宮山潔子, 「幼小の連携と合科的・関連的指導」, 日本生活科・総合的学習教育学会全国大会(山形大学附属中学校), 2008 年 6 月 28 日.

〔図書〕(計 4 件)

- 1 山口匡(沼田裕之・増淵幸男編著), 『教育学 21 の問い』第 3 章「「学ぶ」ってどういうこと?」(46-58 頁), 第 4 章「「学力」ってどうやって身につけるの?」, 2009, 全 277 頁.
- 2 野田敦敬編著, 『小学校学習指導要領の解説と展開 生活編』, 教育出版, 2008, 全 151 頁.
- 3 宮川秀俊, 『「教材学」現状と展望(上巻)』, 執筆部分 - 「技術科の教材とは」, 協同出版株式会社, 2008, 全 371 頁.
- 4 杉浦正好(高橋美由紀編著), 『これからの小学校英語教育の構想』, アプリコット, 2008, 全 172 頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川上 昭吾 (KAWAKAMI SHOGO)
愛知教育大学・教育学部・名誉教授
研究者番号: 1 0 0 3 3 8 9 6

(2) 研究分担者

小宮山 潔子 (KOMIYAMA KIYOKO)
国土館大学・文学部・教授
研究者番号: 8 0 2 2 5 5 8 1
橋本 健夫 (HASHIMOTO TATEO)

長崎大学・教育学部・教授
研究者番号：00112368
山口 匡 (YAMAGUCHI TADASU)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20293730
中田 敏夫 (NAKADA TOSHIO)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：60145646
山田 篤史 (YAMADA ATSUSHI)
愛知教育大学・教育学部・助教授
研究者番号：20273823
船尾日出志 (FUNAO HIDESHI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：80209147
野田 敦敬 (NODA ATSUNORI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30293731
村尾 忠廣 (MURAO TADAHIRO)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40024046
藤江 充 (FUJIE MITSURU)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00106957
吉田 正 (YOSHIDA TADASHI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90024091
森 勇示 (MORI YUUJI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90345942
後藤 ひとみ (GOTO HITOMI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20186894
杉浦 正好 (SUGIURA MASAYOSHI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30235874
宮川 秀俊 (MIYAKAWA HIDETOSHI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30181986
山田 綾 (YAMADA AYA)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：50174701

(3)連携研究者
なし